
不良に恋をする

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良に恋をする

【Zコード】

Z2458D

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

普通の女子高校生木村真弓。そこに突然現れた不良の山本新。新に告白された真弓。なぜか新といふとドキドキしてしまった真弓。親友の弥生に聞くと真弓は新のことを・・・?

「今までの人生の中、こんな恋をするなんて思ってもいなかつた
だろつ・・・。

あなたに出会つまでは・・・。

「おつはよー！」

私は元気よく教室に入った。

「おつはあ 真[マ]」

親友・弥生が小走りで言った。

「弥生びづいたの？なんかいつもより元気だね～？？」

「フフフ・・・・。実わあ！ ジャーン ダーリンが出つ来ましたあ～

」

弥生は面懶氣にプリクラを見せてきた。

「え？ マジ？ ～す～」

「でしょお？」

「つてか、マジかつ」いいんですけども！！

「惚れちゃだめだよッ！ 弥生のダーリンなんだから

「分かつてるつて

私は木村真弓。高校2年生。

そして彼女は親友の中居弥生。同級生。

私と弥生は学校内ナンバーワンの場所、草原にやつってきた。

私は草の上で寝転ぶ。

「弥生は～ーなあ

「なんで？」

「すぐ彼氏捕まえてや・・・。おいてつちゃうなんてひどこよ

「「メンね・・・。出会つちゃったのは仕方ないんだよ

私は飛び起きる。

ううそー！怒ってなんかないよーだ

卷之二

弥生は私の頭を

卷之三

11

二ツ

と笑つた。

「うつそー。弥生だつて怒つてなんかないよーだ

私は弥生とはしゃいでいるけど、

卷之二

私は慌てながら振り返りながら謝る。

いって「な話をお前」

耳にはピアスをして、ズボンはヤバイくらいの腰パンで、髪の毛は金

髮

わが子が出生の時に握り返すと出生に

としている。

もー！ 弥生のばかあ（（泣；

「き・・・木村真弓」

「氣をつけろよ」

野子はそう言って

二
不

と向こうへ行ってしまった。

ムは元々反対の立場

一ノ二三ノ二四ノ二五ノ二六ノ二七ノ二八ノ二九ノ二

気が抜けたまま、放心状態の弥生

教室に入ると、私は自分の席に座った。

卷之三

「也!! ゃ・よ・い!! しつかりしろ!!

私は必死に弥生の体を揺すつた。

亦三歩一歩の間。

「弥生！！よかつたあ～」

「真弓……弥生どうしたんだっけ？」

「你生懶」圓心也。」
——

「アーティスト」

「…モヒックリしたよ」

迷惑かにて二メンね
弥生今日朝ご飯食へてなしから倒
れたらんだ

弥生は照れながら舌を出して

191 CIMA

・
・
・
よかつた。

いつも弥生だ。

私は安心していると、

ガラツ

教室のドアが思いつきり開いた。

・・・さっきの男子だ

一一〇

大丈夫……用があるのは私じゃなし……

そう心から願いながら弥生と話す。

弥生は少し引き気味だったが私は

・・・気にしたくない。

「大村眞吾」

わ
・
・
・
私
だ。

なんで？！なんで私の名前を呼ぶの？！

「？」

付き合う・・・?

六二

さつを会つたばつかじやんツ！――――

ひ
・
・
・
――
懶
・
・
・
・
・

ええ？！」

私の声は教室中に響き渡った。

「はいいい？！」

そう言つと男子は私の腕を引っ張りながら学校を出た。

私と男子は町の中をブラブラしていた。

「どこ行きたい？」

「どうぞどうぞ」おじいさんです。

なぜか敬語になってしまつ。

「・・・あのや」

「はい?」

「敬語・・・やめてくんない?」

「え・・・」

「氣い狂う」

「い・・・めん」

私はなんとなく怖くなつて下を回していく

「・・・俺のこと、怖いか?」

「え?」

「俺こんな髪だし、こんな格好してるからみんな怖がられるんだ。

・・・やつぱ怖いよな」

男子はなんとなくやみしい顔をしていた。

・・・そんな格好をするつてことは、寂しかったんだね・・・。

「怖く・・・ないよ」

「え?」

「あなたのこと怖くなんかない。見かけだけだよ。心は優しい人だよあなたは」

「へへつ・・・。なんか照れるな・・・」

男子は無邪気な笑顔をした。

・・・うわあ。こんな可愛い笑顔なんかするんだあ。

私は一瞬

ドキッ

としてしまつた。

・・・なんだか、この気持ち・・・。

「俺は山本新。・・・あのや、真面目って呼んでいいか?」

「え・・・別にいいよ」

なんか照れちやうな・・・。

「おれのことも気軽に“新”って呼んでいいから」

新は耳まで真っ赤にしながら言つた。

「うん。分かつたよ。

本当に好きなのかな・・・?

こんなことで有り得なしよ・・・

次の日、

和辯道

聞こ覚えのある声だ。

新一

「アーティストの死」

「一緒にきたかつたんだよ

新は照れながら行く。

別にいい。里へ行く。

チラッ

と新の方を見てみると新は顔を真っ赤にしてしまった

ピタツ
と止る。

— 真言 —

手扱られるの、ヤ、なの、

「バ
ー
カ
ー

そう言うと新は私の腕を引っ張つて新の額と私の額を

ヒント

私は驚き、「を開けながらの新を見る。」

「嬉しそぎて恥ずいんだよッ！！」

新は顔を真っ赤にしながら言つた。

私もなぜか顔を真っ赤にしてしまつた。

どうして・・・?

どうして今まで赤くなっちゃうの・・・?

分からぬいよ・・・。

教室に入りすぐに私は弥生の元へ向かつた。

「弥生」

「え? 真弓? おはよ~。どうしたの? ?」

「あのねえ・・・今日実は・・・」

私は朝の出来事をすべて話した。

弥生はその話を聞いたとたん

ニコッ

と笑つた。

「それは! 」・いやで

「え? !」

「真弓」、山本君のこと好きになつたんだよ――――――

「う・・・嘘・・・」

「嘘じやないつて――恋の経験豊富の弥生には分かる」

私が・・・新のことを見・・・好き・・・?

嘘だと言いたい・・・。

けど嘘じやないんだ・・・。

「告白OKしちゃえば? ?

「・・・うん」

そうだよね・・・。

新は私のこと好きだつて言つてくれたんだもん。

私が新のこと好きならOKしなきや。

「じゃあ! 弥生が放課後山本君草原に呼び出してあげる~

「ありがと! 弥生」

私はその後の授業、畠山の「」と頭がいっぱいで先生に怒られてしました。

放課後、

私は草原にやつてきた。

ここで畠山を〇〇するんだ・・・。

ガサツ

誰かが来た。

「真弓」・・・?」

新だ。

とうとう来たんだ。
ヤバイ・・・。

心臓がヤバイくらい高鳴つてる・・・。

「呼び出してどうした?」

「あ・・・のね。私・・・」

「うん?」

「・・・好きなの」

「え?」

「新のことが好きなのッ!」

「ええ?!」

新は顔を真っ赤にして驚いていた。

私も顔を真っ赤にしながら下を向き、田をつぶつていた。

「・・・ありがとう」

「え?」

私は新の顔を見る。

「告白OKしてくれてありがとう」

「うん」

お母さん・・・。お父さん・・・。不良に恋をしてしまった私を許してください。

新・・・、私を好きになってくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2458d/>

不良に恋をする

2011年1月9日03時59分発行